

【要旨】

レントゲン藝術研究所とその周縁 1990年代における東京の現代美術

美術研究科 先端芸術表現専攻 博士後期課程3年 鈴木萌夏

【研究内容】

本論文は、1991年から1995年に東京・大田区で活動したギャラリー「レントゲン藝術研究所」を中心に、1990年代前半の東京における現代美術の特質を解明することを目的とするものである。そうした課題設定の背景には、これまでの日本現代美術史研究における1980年代以降の流れの解明に必要な客観的分析が、必ずしも十分になされてこなかったという状況がある。

研究対象となっているのは、主に次の二つである。第一に、1990年代前半の東京を中心とした現代美術の動向についてである。第二に、レントゲン藝術研究所というギャラリーが1991年から1995年までに開催した展覧会の内容と開催された背景や動機である。研究方法は、当時レントゲン藝術研究所が所持していた約10,900点（そのうち書簡が約780点、文書が約2,700点、クリッピングが約430点、写真が約6,120点、VHSが98点、イベント印刷物が約749点）の一次資料の分析に加えて、関係者へのインタビューなどから事実関係を整理し、事実関係を多角的に分析した。以上の研究目的、対象と方法をもとに本論文を序章と終章を含む全5章で構成した。

序章では研究背景、研究目的、研究方法の順で記述した。研究背景の1項では「現代美術史における1990年代」について、2020年3月に開催された「アーリー90's トーキョーアートスクアッド」展や『美術手帖』2019年6月号の「80年代★日本のアート」特集などの昨今の1990年史観に加え、榎木野衣著『日本・現代・美術』や中ザワヒデキ著『現代美術日本篇』などの当事者による語りをもとに振り返った後、2項として「現代美術における画廊史」についての現状を確認した。次節では研究目的を整理した後、3節に研究方法としてリサーチプロジェクトとして行った「レントゲン藝術研究所の研究」と資料整理・アーカイブについて報告した。

第1章では、美術館ブームや若手作家の発表の場に焦点を当て、1990年代以前の時代背景を考察した。まず、美術館ブームと現代美術を取り扱う美術館、1990年代に盛り上がった美術館ブームを文部省による『社会教育調査報告書』などの資料をもとに分析し、現代美術との関係性を明らかにした。次項では、若手作家の作品発表の場に注目し、貸画廊やオルタナティブスペースが美術シーンにどのような変化をもたらしたかを論じた。

第2章では、レントゲン藝術研究所の設立経緯や活動を分析した後、ゲストキュレーターである榎木野衣が手がけた「ANOMALY」「909-ANOMALY2」と西原珉による「ICONOCLASM」といった展覧会に注目した。また、ディレクターである池内務の独自の運営方針と演出力が、ギャラリーを単なる展示空間に留めず、実験的な場として機能させる重要な要素であったことを検討した。第3章では、オルタナティブ・ギャラリーとしてレントゲン藝術研究所を位置づけ、実験的な展示空間やオープニングパーティーが観客と美術の新たな関係性を構築したことを考察した。最後に終章として1990年代の東京における現代美術シーンにおいて、美術の新たな可

能性や創造的な表現手法がレントゲン藝術研究所を通して提示され、これがアートと観客の新たな結びつきを生み出しており、その結果、従来の美術の枠組みを超えて、オルタナティブなギャラリースペースが重要な役割を果たしたことを指摘し、本論の結びとした。